

第83号
平成23年2月18日
高三 木下昌彦
高一 裕 一稀

読書三昧

甲南中学・高校
図書館
図書委員会
芦屋市山手町
31番3号

灘甲戦の報告

「灘甲戦交流会を振り返って」
高校一年 裕 一稀

僕は去年の六月に灘との交流会を灘校図書館で行ないました。
今回の交流会では、『ムーン・パレス』という本について話し合いました。
この本は主人公のフオックが伯父を亡くし絶望して、人生を放棄していた



「ムーン・パレス」という題名な小説です。
この交流会でまず話題になったのは、「なぜムーン・パレスという題名なのか？」ということでした。
時 友人に助けられ、そこで見つけた奇妙な仕事をして行く内に自分の家の謎にたどりついていくという内容の書物(?)
中ではフオックがムーン・パレスに行ったのは、2回だけで、後半の方にはほとんど出てこないのではありませんかというところになりました。また、これから「ムーン・パレス」という言葉の意味はな

く、むしろ他の言葉を示唆するために使われているのではないかと、意見も出てきました。僕は少し考えてから、その言葉はムーンの部分、つまり月という結論にたどり着きました。なぜならこの物語では月という言葉が次山使われていて、使われ方も場面毎に違っていたからです。これから派生して次の話題は、「月はどのような意味で使われているか？」ということになりました。前述したように、この物語では月という言葉や月に関連する言葉が様々な場面で様々な意味で使われています。そのため、どの部分でどのような意味で使われているかを探す

のが大変でしたが、そのおかげで色々な意見が出てきました。例えば物語の人物が死んだり、死にかけてたりするのは月の負の意味からとられているという意見や、主人公の生活は月と地球の関係に例えることができるという意見、また主人公や主人公に關係する人々が月に關係する惑星などに例えることができるという意見も出ました。
ここまで月について意見を交換していましたが、その後話題は本の内容そのものについてのことになりました。まず挙げられたのが、「この本は本当に青春小説なのか」という話題です。この事については僕もこの本を読んでいた時から疑問に思っていました。また他の人達も同じような疑問を持っていたのでみんな考えこんで、最初のうちは意見がなかなか出てきませんでした。しかし、時間が経つとちらほらと意見が出てきました。例えば、こんな意見です。
「この物語の舞台である年代は世界が不調だった。その中でこんなこと(物語の中で主人公がし

ていた事)をしていた、つまりそんな時代に破天荒な事をしていたから青春ではないか。この意見はとても分かりやすく「なるほど、これなら青春小説と書かれていても分からないことは無い」と僕は思いました。
その後はこの物語においての月と死の関係や、主人公の人間としての位置づけ等色々な事を話し合いました。
今回の図書委員交流会は甲南側が2人で灘校側が6人と、なかなか追い詰められた状況でやりました(しかも途中で大雨が降り、ほとんどの人が帰ってしまい助けも期待できませんでしたが、人数が少ない分濃い内容で議論できたと思います。
(まあ本の内容も中々に濃かったです)。灘の図書委員の方々と気軽に話をすることが出来たのも良かったです。今年甲南で灘との交流会が行なわれますが、今年も灘の生徒と本について沢山語り合いたいと思います。後、暇な図書委員(また図書委員でなくとも本が好きでその時暇な人)はできる限り参加して下さい。お願いします。(正直二人じゃツライです...)



目次

- 1 灘甲戦を振り返って
- 2 研修会に行つて
- 3 4 本の紹介
- 4 編集後記



私達甲南図書委員は十一月二十日、六甲学院で行なわれた図書委員の交流会に参加しました。交流会には、合計で十一校の六二名が集まって、五つの班に分かれて意見を交換しました。

まず、それぞれの班の中で簡単な自己紹介をした後、会議がスタートしました。

議題は、「六甲学院の図書館は、年々利用者が減少している」、どのようしたら利用者が増加するか」という内容で、数々の意見の中から「図書館でのイベントの開催」「読んだ本の数によって賞を与える」などの意見が採用されました。ほかにも「館内がシンプルのため、少し鮮やかな色にしてはどうか」というユニークな意見も出ました。他に出席した議題としては、「図書館のホームページの利用者の増加を図るにはどうすればいいか」な

どもあげられました。この議題についての「携帯電話からのアクセスを可能にする」や「内容をもっと簡単にする」など、たくさん意見が出されました。

私はこの交流会に参加して、とても充実した時間をすごすことができました。また、この交流会で得た意見を甲南の図書館に

も生かしていけたらいいなとも思いました。こういう図書委員の交流会に出席したのは初めてだったので緊張しましたが、このような経験は今まで無かったので、良い経験をしたと思います。また、この経験をこれから図書委員交流会や将来に役立てていきたいです。もしもまたこういう機会があれば、ぜひ参加したいです。

また、この交流会で得た意見を甲南の図書館に



古本市の売上げをアジアセンター21に寄付

アジアセンターから本をお借りし、読書月間に展示しました

昨年度の文化祭で行った古本市では、八万六四三二円の収益を上げることに出来ました。相談の上、僕たち図書委員は去年の9月に、アジアセンター21という所へ寄付することに決めました。アジアセンター21は、アジアへ図書館建設を目指していたり、アジア各国の本を集めた図書館を



上:読書月間の展示の様子 下:アジアセンター21にて



運営している団体です。九月二十五日に代表者二名で訪問してきました。寄付のお礼として感謝状を頂き、またそれに加えてアジア各国に関する本を貸してもらったことになりました。貸してもらった本は、十一月の読書月間で図書館で展示しました。展示に当たっては、センターの方達に手製のパネルを作っていたり、協力していただきました。センターの方、本当にありがとうございました。



りがとございました。来年度も文化祭にて古本市を行う予定です。9月からは回収を始めますので、「家庭で不要になったら本などありましたらご協力をお願いします。」

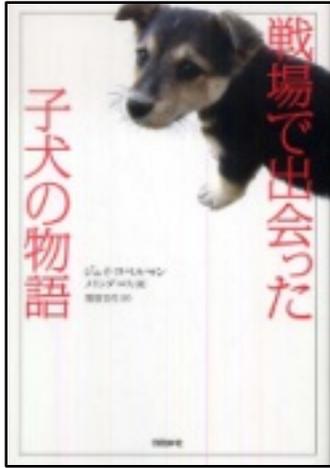
『戦場で出会った子犬の物語』

高校三年 木下昌彦

二〇〇四年イラク。ファルージャに侵攻したアメリカ軍第三海兵隊第一大隊、通称「ラヴァ・ドッグズ」が、ある廢屋で一匹の子犬を発見し

た。爆弾のかす、泥にまみれたこの子犬は「ラヴァ」と名付けられ、隊員たちに保護された。しかし、筆者のコベルマン少佐の頭には常にある言葉があった。それは米軍規則「一般命令1 A」だ。その内容は種類に関わらず家畜や野生動物をペット、マスコットにする、飼ったり世話を焼いたりするのは厳禁なのである。もしもラヴァの存在が知られると処分されてしまう。死が隣り合わせの日常、何もかもが麻痺したような戦場の中でラヴァの存在はあまりにも無邪気で無垢だった。コベルマン中佐はそんなラヴァを、何とかアメリカに脱出させた。いと苦心する。見ず知らずの人にメールを送り、助けを呼んだ。

この一匹の無邪気な子犬を通じて、「人間らしさ」を見つけて出していく隊員たち。イラク戦争の状況と、それに関わる人たちの心の内が描かれている作品。本には当時の写真がカラーで載せられており、ラヴァの可愛い写真も残っている



書名 戦場で出会った子犬の物語
 著者名 ジエイ・コベルマン
 出版社 日経BP
 分類 Yコベ

相棒 season 7上

中学一年 平田 奨



自分がこの本を読もうと思ったきっかけは、ドラマ「相棒」を見てはまったからと、図書館にある小説「相棒」シリーズをほぼ全巻読破して、続きが読みたいなと思ったからです。

この本で小説家されたのはドラマ「相棒」season7から、瀬戸内米蔵元法務大臣が事件の力ギを握る「還流」、亀山薫の最後の事件となる「レベル4」など前半の7話です。

その中で自分が一番面白かったのは、「レベル4」です。

この話は、国立微生物研究所の高度安全実験室で殺人事件が発生し、その現場から持ち去られた殺人ウイルスによるアロの事件です。その話の中で亀山薫が命を懸けて解決しようとするのが格好いいなと思いました。

自分はドラマのseason7をあまり見ていなかったのですが、亀山薫が特命係を去ったことを知りませんでした。この本を読んで、亀山薫が特命係を去ったことその理由がわかりました。そして、相変わらずの杉下右京の冷静な推理と、着眼点には、さすがだなと思いました。



書名 相棒 season7上
 著者名 輿水 泰弘
 出版社 朝日新聞出版
 分類 y あい 7 1

「俺俺」 高校3年D組 小野 雲平

この本の作者をご存知の方はなかなか目が高い。じつはこの本の作者は文藝賞、三島由紀夫賞といった数々の賞をとら
れている作家であり、06年まで早稲田大学文学部客員助教と結構な御方である。

さて、肩書きで本の内容を判断してはいけない。私はこの本を実際に読んでみたのだが、書き方は最近の言葉を使い、
読みやすい。そして表紙絵は幾ばくかギョツとさせられる絵を使い「これ読んでみようかな」とおもわせるものに「役買っ
ている。何せ口にガソリンスタンドのホース突っ込まれてる会社員見てギョツとしない人間も珍しいが・・・内容は・・・
登場人物、「俺」 上司「俺」 母、「俺」と、こう文字にすると何が何だか分からない。この文学とホラーの紙一重が
楽しめるようなら、いっぱしの読書家に違いない。すべては何気ない行動からはじめる。成り行きで「オレオレ詐欺」を
してしまった「俺」は気付いたら別の俺になってしまった。上司も俺、母親も俺、俺ではない俺、俺ではない俺、
こんな自己の存在と他者の存在がどうでもいらい混じりあってしまった環境は人にとって、それはどんなに愉快で、
孤独で、混沌としているに違いない。そんな環境に立たされた「俺」は増殖していく俺に耐えきれず、ついに・・・とい
う内容である。想像してみてほしい。自分はあなたで、あなたも自分のような世界を。隣人も俺、世界の裏側まで俺。
も下も左も右も北も南も西も東も俺。

自分の存在に自信が持てるか？俺が生きていて俺は死んでいく世界に俺は生きているのか？
普通、登場人物の視点に立つて読むのが読者の定石といわれているが、この作品は何処にでも立てて何処にも立てない
作品のように感じた。物語というには生温いほどの現実と錯覚するほどの世界が描かれている。

ハッピーエンドでも無く、バッドエンドもない素晴らしい読者には受け入れられるものだろうか？
決して内容は読みやすくはないが、かといって難解な内容でも無い。文学として読むのもよし、ホラーとして読むのも
よし。ただ読んでいて「俺」を見失わないように用法、要領を正しく守りましょう。



書名：俺俺
著者名：星野 智幸
出版社：新潮社
分類：Y ほし



「編集後記」

今年度最後の読書三昧いかがだったでしょうか。
高三の方にとつてはこれが最後の読書三昧となります。

その為、今回は高三の図書委員抜きで作ったのでレイアウト等が変になってくるかもしれませんが大目に見ていただければ幸いです。

また、最後までいうことで灘甲戦や図書委員交流会、アジアセンター、選書など読み応えがある内容となっているので喜んでいただければ幸いです。

(図書委員一同)